

関連学会印象記

第19回日本心血管インターベンション治療学会 学術集会 (CVIT2010) に参加して

尾崎 和幸*, 小田 弘隆*

2010年8月22日から24日までの3日間、仙台厚生病院の井上直人先生の会長のもと、杜の都仙台市にて第19回日本心血管インターベンション治療学会学術集会 (CVIT2010) が開催された。昨年、日本心血管カテーテル学会 (JACCT) と日本心血管インターベンション学会 (JSIC) が統合し、今回が統合1回目の学術集会であった。学会員は6,000名を越え、一般演題は、メディカル、コメディカルを合わせ約1,000題が採択され、多くの参加者で賑わった。学会に先立って、前日の21日に行われた市民公開講座では、冠動脈インターベンションのライブデモンストレーションが行われ、大変好評であったとのことであった。

著者は8月22日午後に仙台に入った。晩夏の東北での学会ということで涼しさを期待していたのだが、全国的な今夏の猛暑の例外に漏れず仙台も非常に暑いというのが第一印象であった。ホテルにチェックインし、事前登録の確認を済ませた後、翌日の発表に備え会場を下見した。会場の一つであるウェスティンホテル仙台は学会直前の8月1日にオープンしたばかりであり、37階からは仙台市が一望でき、遠くは蔵王連峰まで見渡せ、素晴らしい景色を堪能できた。この後、CVIT2010の特別企画の一つであるリーナルシンポジウムを聴講した。第一部では、腎動脈狭窄の病態生理、スクリーニングから血行再建等の具体的な治療法、最近



写真1 学会会場にて

*新潟市民病院循環器科

承認された新しいステントの成績について国内の3人の講師の先生から講演があり、第二部ではドイツのHeart Center Bad KrozingenのThomas Zeller先生よりASTRAL trialについて詳しい解説や解釈についての説明があった。翌日の著者の発表内容にも参考になる点が多く、大変勉強になった。

翌23日午前、まずはシンポジウムである「FFRを臨床にいかに関活用するか？」を聴講した。FFRはfractional flow reserveのことであり、冠動脈インターベンションにおいて心臓カテーテル室内で冠動脈狭窄の機能的診断を行える方法であり、欧米(ESC, AHA/ACC)のガイドラインでは、非侵襲的な負荷検査法と並んでFFRの有用性が記載されている。日本では経皮的冠動脈形成術(PCI)にFFRを利用している施設は限られていたが、FAME Studyの発表後に再び脚光を浴びてきている。著者には殆どFFRの経験がないため、本シンポジウムを楽しみにしていた。8人の講師の先生よりFFRの基本的理論、臨床応用から、最先端の話題、症例提示があり、幅広い内容であった。特に、和歌山県立医大の赤坂隆史先生から分かりやすい臨床におけるピットフォールの講演があり、印象的であった。

その後は、自分の発表である。今回の著者の応募演題は新潟市民病院におけるこれまでの経皮的腎動脈形成術の成績のまとめに於ける報告であり、Renal artery stenosisの口述セッションに分類されていた。CVIT2010では英語セッションと日本語セッションがあり、著者のセッションは英語セッションであった。英語には全く自信がない著者は、事前に用意しておいた原稿を読むことで何とか発表を終えることが出来た。座長は2人とも日本人(岸和田徳州会病院の横井良明先生、信州大学の宮下裕介先生)であったため質問の内容はある程度理解できるものと考えていたが、横井先生の英語が流暢で質問の内容を十分に理解できず、質疑応答の最後は横井先生にフォローしていただく始末となってしまった。改めて、語学能力の重要性を認識した瞬間であった。セッション終了後に横井先生に内容について詳しく質問したところ、とても丁寧に解説、アドバイスをいただき、この場を借りて感謝申し上げたい。他の3演題のうち2題は経皮的腎動脈形成術の成績に関するもの

であり、当院との現状や成績の比較を行うことが出来、著者にとっては大変有意義なものとなった。

著者の発表終了後、すぐにランチョンセミナーへ向かった。当科の科部長である小田弘隆の座長で、冠動脈ステントの将来像について2題の講演があった。講師の1人であった九州大学の江頭健輔先生は、DESの血管内皮修復不全に対する生体吸収性ナノ粒子溶出ステントの役割という題で講演され、PLGAナノ粒子をdrug delivery systemとして用い、その粒子をいわゆる電気メッキの原理にて金属ステントにコーティングして作成された新しい薬剤溶出性ステントの話題は非常に興味深いものであった。先生には今春の新潟での研究会で個人的に大変お世話になり、講演終了後に改めてお礼を申し上げることが出来た。

午後からは、フォーカスセッションである腎動脈インターベンションとその適応を聴講した。PTRAに関するセッションへは三度参加することとなったが、今回のCVIT2010ではメインテーマが「パンパスキュラーインターベンションの現状と将来」であり、冠動脈インターベンションに関するセッションと同様に、末梢血管に対するインターベンションに関するセッションが多く企画されていた。著者も発表演題がPTRAに関するものであり、これを機会に詳しく勉強することを決めて、CVIT2010へ参加していた。7人の講師の先生が腎動脈狭窄症の病態生理、評価方法、治療の現状、新たな試みを講演され、著者も本学会での勉強内容を総括することが出来た。セッションの終了後、東北大学の伊藤貞嘉先生に腎動脈狭窄症とレニン活性の関係について、詳しく質問する機会も得られた。

その日の最後はパネルディスカッションである「地方の循環器医療について考える、高度循環器医療は地方では不要か？」を聴講した。現在、日本の各地で大学医局からの医師派遣が減り、病院勤務医師数が減少し、医療供給体制が不十分な状況に陥りつつある。循環器科領域でもそれは同様であり、地域によっては緊急性のある治療を施行できないなど医療崩壊状態となっている。そのような地域では医師たちの疲弊も著しく、医療の安全を確保しつつ、限られた医療資源をどのように配置、構成するべきかなど解決すべき問題

は多い。総合司会の八雲総合病院の長島仁先生を中心としたパネルディスカッションでは、杉田玄白記念公立小浜病院の本馬徳人先生、出水総合医療センターの吉井博先生、カレスサッポロ北光記念病院の看護師である高橋亜希氏の3人のパネリストから厳しい現状と必死の努力が生々しく語られ、厚生労働省政策医療課の池上直樹氏から国としての取り組みの現状、読売新聞東京本社医療情報部の田中秀一氏から読売提言について発表があった。最後にゲストコメンテーターである済生会横浜市東部病院の塚原玲子先生より、実際に診療のお手伝いに行かれている岩手県立宮古病院の現状を、いわゆるニセ医者事件の背景、今後の提言と併せて講演があった。著者も地域医療に携わる一医師として大いに考えさせられ、また、CVIT2010のような学術集会でもこのような問題に取り組む意義を感じた。

2日目の夜は、仙台在住やCVIT2010に参加している新潟大学第一内科在局時代の先輩、後輩らと

仙台名物である牛タン料理に舌鼓を打った。

最終日の24日は、恒例の冠動脈および末梢血管に対するインターベンション治療のライブデモンストレーションが、仙台厚生病院および済生会横浜市東部病院からの二元中継にて行われた。著者は主に末梢血管に対するインターベンション治療を勉強したが、大腿動脈に対するレーザー治療、腎動脈狭窄に対するPTRA、頸動脈狭窄に対するステントング等、まさにメインテーマであるパンバスキュラーインターベンションを網羅した、幅広い内容となっていた。

同日昼、著者は仙台を後にした。参加したどのセッションも盛況で、殆どの会場で立ち見が出ている状況であった。2年後のCVIT2012は、当科の小田弘隆を会頭とし2012年7月12日より14日まで新潟県新潟市の朱鷺メッセで開催を予定している。もうすでに準備は始まっているが、今回のCVIT2010に引けを取らない、意義のある学術集会とすべく、身が引き締まる思いであった。